Ⓑ

小　論　文

時　　間　　120 分

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはならない。
2. この問題冊子は 11 ページである。印刷不鮮明の箇所などがある場合には，監督者に申し出ること。
3. 解答用紙の指定欄に必ず**受験番号**を記入すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に**横書き**で記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

＜資料＞は，鶴田想人「無知学(アグノトロジー)の現在　＜作られた無知＞をめぐる知と抵抗」(『現代思想』2023年6月号)の一部である。資料を読んで，下記の設問に答えなさい。

(1)　下線部①「無知が『作られる』」とは，どういうことか，説明しなさい。

(1行20字詰め，10行以内)

(2)　下線部②「重要なのは無知の自然さを疑うことである」とは，どういうことか，説明しなさい。

(1行20字詰め，10行以内)

(3)　筆者は，波線部「無知学の達成」は何だと説明しているか，筆者が無知をどのように捉えているかも踏まえ，要約しなさい。その上で，作られた無知の事例を1つ挙げ(ただし，タバコ，オウコチョウ，水俣病の事例は除く)，筆者の考えに即して，その事例を説明しなさい。

(1行20字詰め，30行以内)

(注意)

解答にあたっては，解答用紙の1マスに1字を使い，句読点，引用符，括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし，算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しおよび行を改めたときには，1マス空けること。

＜資料＞

鶴田想人「無知学(アグノトロジー)の現在　＜作られた無知＞をめぐる知と抵抗」(『現代思想』2023年6月号)

無知学とは，歴史のなかで「無知」――私たちの知らないこと――がいかにして作られてきたかを探究する学問である。しかし，無知が「作られる」とはいかなることだろうか。まずは提唱者プロクターとシービンガー①による，2つの植物をめぐる無知学の代表的な事例を紹介しよう。タバコとオウコチョウは，いずれも大航海時代以降のヨーロッパ人によって「新大陸」で「発見」された植物だが，その後の運命は対照的であった。今日，タバコは世界中で栽培され消費されている一方で，オウコチョウは観賞用に栽培されてはいるものの，その利用法はほとんど知られていない。何がこの違いを生んだのだろうか。

タバコ(*Nicotiana tabacum* L.)はアメリカ大陸原産のナス科の植物で，古くから先住民たちによって医療や宗教的な儀式などさまざまな場面で利用されていた。ヨーロッパには医師ニコラス・モナルデスが「万能薬」として紹介(1571年)して以降，本格的に受容されていった。ひとたびヨーロッパで受け入れられると，タバコは瞬く間に世界中に広まっていった。なぜそれほど急速に広まったのだろうか。そこには当然，ニコチンによる依存性があったが，タバコに依存したのは個人だけではなかった。国家もまた，タバコから得られる莫大な税収に依存していったのである。17世紀以降，重商主義のヨーロッパ諸国はタバコに課税するか，または専売制度を導入してその輸入から販売までを国家の管理のもとに置いた。そして19世紀末に紙巻きタバコの大量生産が可能になると，その手軽さによって喫煙の習慣はますます多くの人々に浸透していった。

しかし20世紀半ばにその発がん性が指摘されて以降，タバコの販売にはより巧妙な戦略が必要になった。その戦略とは何であったか。それは「疑念を作り出す」ということであった。1998年にアメリカのある大手タバコ会社の内部文書から見つかった次の一節に，彼らの戦略の大綱が示されている。「われわれは疑いをつくりだす。一般大衆の頭にある「事実の実体」に太刀打ちできるのはこれしかないからだ」。プロクターは『がんをつくる社会』(1995年。以下，カッコ内は原書の出版年)以来，アメリ

カにおけるタバコ企業の「陰謀」を追究し，大著『黄金のホロコースト』(2011年)を書き上げた。それによると，喫煙と肺がんの因果関係が示され始めた1950年代以降，この業界は(大手広告会社の入れ知恵で)業界団体を立ち上げ，「喫煙と健康」の問題に関する「独自の研究」を鳴り物入りで推し進めていった。しかし蓋を開けてみると，彼らが実際に行ったのはタバコの発がん性の解明とは無関係なさまざまな基礎研究——遺伝学や生化学など，がんの原因よりもメカニズム(機序)に関するもの——であった。何のためにか。第一には，タバコががんの原因である，という事実から人々の目を逸せるためであった。また第二には，業界が喫煙の健康リスクの究明についてできるだけのことはやっている，と見せかけるアリバイ作りのためでもあった。さらに業界は，タバコの発がん性を示す証拠に対して疑念を投げかけ，タバコの有害さを結論するには「さらなる研究」が必要であると主張し続けた。論争が長引けば，その分だけ彼らは規制を受けることなくタバコを売り続けることができるのである。しかもその一方で，業界はニコチンの量を操作するなどして，ますます人々が「安心して」タバコに依存するように仕向けていった。こうして，タバコは今日も世界中で大量に吸われているが，それは業界の右のような「PR」戦略の賜物なのである。

一方で，オウコチョウ(*Caesalpinia pulcherrima* L.)という植物の名を聞いたことのある人は少ないだろう。それもそのはず，オウコチョウはヨーロッパにおいて(その利用法が)無視され，忘れられた植物なのである。オウコチョウもタバコと同じく，新大陸——というよりもカリブ海地域で何人かの博物学者によって報告されたマメ科の植物である。近世においてヨーロッパの植民地であったカリブ海地域の先住民や奴隷たちは，この植物をさまざまな用途で利用していた——とりわけ中絶薬として。例えば，博物学者のマリア・シビラ・メリアンは次のように記している(1705年)。「オランダ人の主人からひどい扱いを受けていたインディアンは，子供が奴隷になるくらいならばと嘆き(この植物の)種子を用いて中絶を行っています」

しかしこの植物の中絶薬としての効用は，ヨーロッパには伝わらなかった。なぜだろうか。シービンガーは『植物と帝国』(2004年)の中で，その理由を次のように分析した。ある植物がその薬効を認められ，公定の『薬局方』に記載される(認可される)ためには，医師たちによる治験を経る必要があった。しかし，例えば(月経を促す)通経剤の治験は数多く行われたにもかかわらず，中絶薬の治験はほとんど行われなかっ

た。安全な中絶薬の開発は，18 世紀のヨーロッパの医師たちにとって優先的な研究対象ではなかったのだ。なぜか。それにはさまざまな理由が考えられるが，当時のヨーロッパ諸国が人口増加に熱心であったことを考えれば，女性の出産を制限するような薬剤をあえて医師たちが開発しようとしなかったことも頷けるだろう，とシービンガーは述べる。中絶薬の開発が禁じられていた証拠はないが，（女性は中絶するべきではないという）社会通念がその開発の妨げとなったのだ。こうしてオウコチョウは，現在ではもっぱら観用植物として知られ，その重要な薬効は忘れられたのである。

このように，タバコとオウコチョウは，いずれも新大陸で発見され，医師や博物学者によってヨーロッパに伝えられた後，正反対の道を歩んでいった。タバコは国家の利益（税収）に結びつき，今や世界中で生産・販売・消費されている。そしてその流通は私たちがタバコの発がん性を知らされないことによって近年まで維持されてきた。一方でオウコチョウの中絶作用は国家の利益（人口増加）に反するために忘れられ，今日ではもっぱら熱帯地域で観賞用に栽培されている。これらの事例は，私たちに知識をもたらすとされる科学が，決して社会（企業や国家などの利害関係）から独立したものではなく，そのさまざまなアクターの思惑によって時に意図的に，時に意図せずして無知をも作り出すことを雄弁に示唆している。こうした知識／無知の形成のメカニズムを探るために，プロクターとシービンガーは「無知学」を創始したのである。

2008 年の論文集『無知学』の巻頭に，プロクターは無知学のマニフェストともいえる論文を寄せている。それによると，「知らないこと・知られていないことの歴史性と人工性――そしてそれらを研究することの潜在的な実り豊かさ（…）を示すために」，ギリシャ語の「無知（agnot-）」と「学（-ology）」を組み合わせた「無知学（agnotology）」という語を，1992 年に言語学者 I・ボウルの助けを借りて考案したのだという。つまり無知学の構想自体は，論文集の出版から 15 年以上も遡ることになる。事実，プロクターは 1995 年の『がんをつくる社会』においても，すでにこのアプローチを取り入れていた。

プロクターはそのマニフェストの中で，無知を 3 つに分けている。

① 生来の状態としての無知

② 失われた領域，または取捨選択（受動的構成）としての無知

③ 戦略的策謀，または積極的構成としての無知

①はもっともありふれた無知の見方であろう。それは（生まれながらにして）まだ何かを知らないという，知識の欠如を意味している。しかし，この欠如は同時に資源にもなる。人は何かを知らないからこそ，その何かを探究することができるのだ。プロクターも言及しているように，この資源としての無知は，科学社会学の創始者R・マートンが「特定された無知（specified ignorance）」と名付けたものである。無知は知識の欠如だが，その欠如を特定することでそれを資源（つまり科学研究の問い）に変えることができるのである。②もまた科学社会学――とはいえ，マートンのそれを批判して登場した潮流――に関係する。社会学者M・スミスソンは，科学的知識さえも社会的に構成される（つまり利害関係などの影響を受ける）とする「科学的知識の社会学」の考え方を無知にも適用して，「無知の社会的構成（social construction of ignorance）」を唱えた。探究すべき事柄（つまり特定された無知）に対して，実際に探求できる事柄は遥かに少ない。そこで研究の優先順位が問題になるが，そこにはさまざまな社会的要因あるいは「価値」が入り込む。知識がそのように作られるならば，無知もまたそのように社会的に作られるものとして見られるべきだというのである。こうした1980年代の科学社会学の成果を歴史学に適用したのが，プロクターの無知学であったと言える。ここでプロクターが付け加えたのは③の観点である。つまり無知が社会的に作られるものであるならば，それを意図的に作り出すこともできるだろう。事実，タバコの発がん性や軍事機密など，私たちにあえて秘密にされていることが数多くあることを，無知学は示してきたのである。

こうして，プロクターのいう無知の3区分は，それぞれ①有用性（マートン），②構築性（スミスソン），③意図性（プロクター）という無知の異なる次元に対応すると言える。そしてそのそれぞれにおいて，無知は欠如から資源へ，生来のものから構成されたものへ，意図せざるものから意図的なものへ，とその見方を転換させてきた。それゆえ無知学は，無知の意図的生産に焦点を当てるもの――「ある種の科学技術によって作られ，維持され，操作されるものとしての無知または疑念や不確実性」の探

究——と理解されることが少なくない。しかし本稿では，むしろ上述の3次元すべてにおいて無知という複雑で重層的な現象を分析できるようにしたところにこそ，無知学の達成があると考える(実際，これらの3次元は現実の事例において複雑に絡み合っている)。

無知の意図性(誰が)と構築性(どのように)の分析に加え，無知の有用性を分析する際には，無知とそれによる(不)利益の帰属——誰の無知が，誰にとっての(不)利益となるのか——という視点が欠かせない。たいていの場合，無知は知らない人(unknower)に不利益をもたらす。つまり相手があることについて無知であることが，自分にとって利益となる場合に，無知は意図的に作られるのである(「戦略的無知(strategic ignorance)」)。しかし時に，無知であることが知らない人自らにとって利益となる場合もある。例えばあることを知らない方がむしろ自分たちの利益になる場合に，意図的に自らの無知が選択される場合がある(「有徳な無知(virtuous ignorance)」)。一方，一人一人はその自覚を欠いていながら，まさに無自覚にあることを知らないという状態が，その人たち(しばしば支配的集団)の利益の維持につながっている場合もある(「白人の無知(white ignorance)」)。

前節のタバコとオウコチョウの事例をこれらを軸に分析してみよう。タバコの発がん性は，初めは知られていなかった(①)が，やがてそれが知られるようになると，業界は意図的にそれに関する無知を人々の間に作り出すようになった(③)。それは彼らの経済的利益となり，人々の健康上の不利益を招いた(①)。その過程で科学者たち(歴史家まで！)が起用されたが，彼らがどの程度知っていて(自覚的に)無知生産に加担したのかはわからない(②および③)。またオウコチョウについては，ヨーロッパ人たちの偏見や社会通念によって彼らの「無知」が維持されたわけだが(①および②)，そもそも砂糖やコーヒーなどの他の有用植物に比べて，中絶薬の知識は入手困難であったことも理由の1つであった。奴隷たちはヨーロッパ人に，彼らへの抵抗の手段でもあったこの薬草の知識を秘密にしようとしたからである。この点で，ヨーロッパ人たちのオウコチョウに関する無知は，植民地の人々によって意図的に作られたとも言えるのである(③)。

さらに無知学は，個々の事例における無知生産(ignorance production; agnogenesis)を研究することで，より一般的な無知生産のパターンをも明らかにしよ

うとする。プロクターは『がんをつくる社会』において，発がん物質であるアスベストや石油化学製品が，タバコとまったく同じ手口で規制を逃れてきたことを述べている。またシービンガーは『奴隷たちの秘薬』(2017年)において，オウコチョウ以外にも，先住民や奴隷たちの民間医療の知識が，彼らの死滅や奴隷化，あるいはヨーロッパ人に対する秘密主義や，反対にヨーロッパ人の彼らに対する先入観，そして互いの言語間の摩擦などによって，その伝播・普及を妨げられ，忘却されていったことを論じている。

このように無知学は，作られた無知という視点から歴史を眺め，その無知が誰によって／いかにして作られ，それが誰の利益／不利益になるのかを明らかにしようとするものである。プロクターとシービンガーの論文集以降，社会学者M・グロスとL・マゴイによる「ラウトレッジ・ハンドブック」(2015年，第2版2022年)に加え，より直接に『無知学』を引き継ぐ科学哲学者J・クラーニーとM・キャリアによる論文集『科学と無知の生産』(2020年)などが出版され，無知学はその広がりと深さを増してきた。また無知学は欧米のいくつかの大学や高等教育機関で教えられ，日本においても科学技術史／科学技術社会論のハンドブックで紹介されたほか，日本科学史学会においてシンポジウムが開かれるなど，徐々にその認知を広げている。

（　中　略　）

以上はいずれも欧米の事例研究であった。しかし日本にも当然，無知学の事例はある。

20世紀には日本においてもさまざまな無知生産が行われた。その最たるものは，水俣病をはじめとする公害におけるそれだろう。水俣病は，周知の通り戦後日本を代表する公害であり，1956年に最初の患者が(公式)発見され，1968年に政府によって公害認定されるまで，約12年もの年月を要した。なぜこれほどの年数がかかったのだろうか。その原因がチッソ(当時は新日窒)水俣工場の排水に含まれる有機水銀であることが認められるまで，原因究明はさまざまな障害にぶつかった。すでに1959年には原因が有機水銀であることは突き止められていた。しかしそこから企業側の猛烈な(そして恥知らずな)「反論」が始まった。まずは相手側の主張の穴を指摘してみせ

(疑念を投げかけ)，自らの荒唐無稽な仮説(爆薬説やアミン説——ここで業界団体が加勢した)を対抗馬として主張し，それらをマスメディアが取り上げることで，まだ決着がついていないかのような印象が作り出されたのである。ここでも，あの「タバコ戦略」や「疑念の商人」を思わせる手口で無知が作られ，その間工場は操業を続け，排水を流し続けたのであった。

この一連の過程に関する環境学者・宇井純による分析は，日本における優れた「無知学」の研究といってよい。宇井は『公害の政治学』(1968年)において，「公害の起承転結」という考え方を提出した。公害が発生すると，原因究明のための努力が開始される。しかし原因究明がある程度進むと，企業などから反論が提出される。そして一般の人々の目には事実がどれだかわからなくなり，正論と反論が中和されてしまうというのである。この「公害発生→原因究明→反論提出→中和」というパターンは「古く足尾銅山の鉱毒事件以来，現在まで数多く繰り返されてきた」という。また宇井は「中和」における(広義の)メディアの働きについても述べている。「酸とアルカリをビーカーの中へ一緒に入れなければ中和が起こらないように，正論と反論の中和も，両方をぶつけ合うための場が必要になる」。この「場」とは，「マスコミによる報道とか，いろいろな専門家を集めた調査会とか，官庁など」である。タバコの発がん性や地球温暖化の否定と同じからくりが，ここですでに明瞭に洞察されていたのである。

しかしここでも，無知を作ったのは企業や業界団体だけではなかった。水俣病の運動に医師として関わった原田正純は，医学や司法などの制度のあり方の中にも，事態の解明を長引かせる落とし穴があったと指摘している。例えば原因物質を特定しないかぎり行政も対策をせず，企業も責任をとらないため，原因究明が至上命題となるが，それには時間とコストがかかるため，予防や治療などに研究の資源を割くことができなくなる(研究の優先順位によって生じる副次的な無知)。また，患者自身が——企業への遠慮や医学への不信から——水俣病であることを隠したがったことも，被害の全貌解明を困難にしていたという(患者の秘密主義によって生じる無知)。さらに俯瞰すれば，このような公害が生み出された背景には，前節[注]で言及した経済学における不可視化の問題もあっただろう。宇井は日本の産業(資本主義)の発展の理由の1つに，「公害の無視」を挙げている。本来公害(環境汚染)への対策に充てられるべき費用を，そのまま投資に回すことが許されることで，日本企業は戦後急速な発展を遂げた

というのである(科学の落とし穴と法整備の問題)。

このように水俣病1つをとってみても，そこにはあらゆる形態・次元の無知生産があり，その上に公害が生み出されるべくして生み出され，しかも適切な対策が遅らされて被害が拡大するという構図があったことがわかる。宇井が水俣病を「公害の原型」と呼ぶように，それらの原因が1つ1つ解決されないかぎり，公害は繰り返す。事実，水俣病の原因について「論争」が続くさなかに新潟(第二)水俣病が起こり，その後もさまざまな公害・薬害事件において，同じような悲劇が繰り返されてきた。そして今や地球環境問題という，誰も「責任」をとることのできない地球大の公害問題が起こりつつあるのである。

以上，本稿ではさまざまな無知学の事例と，無知生産のパターンを検討してきた。以上に見るように，無知学はそうした無知生産の事実やメカニズムを明らかにする学術でありながら，往々にして運動的な要素をもつ。では，無知学は学術なのだろうか，それとも運動なのだろうか。あるいは，そのどちらもなのだろうか。この問題について最後に考えてみたい。

ここで無知学以前のシービンガーとプロクターの著作を見ておくことは無駄ではないだろう。実は彼らの研究者としてのキャリアは，科学の「価値中立性」概念を批判するところから始まったのである。まずシービンガーは『科学史から消された女性たち』(1989年)において，科学が近代以降，その制度から女性を締め出してきたこと，しかもそれを男女の「自然な」差異に基づくものとして――解剖学などを動員しつつ――正当化してきたことを明らかにした。科学がそのような歴史をもつ以上，それは中立などでは決してなく，むしろ女性に対する偏った知識(偏見)の再生産装置と化してきたとシービンガーは喝破する(例えば，女性を科学から締め出しておきながら，「女性は科学に向いていない」と言うなど)。プロクターもまた『価値自由な科学？』(1991年)において，古代から現代に至る科学における「価値自由」の理念の歴史を辿りつつ，その理念が歴史上さまざまに意味を変えながら，その都度の政治的な文脈のなかで形成されてきたことを明らかにした。「価値の主観性」とセットになった「科学の中立性」という理念は，近代科学の歴史に通底するある種のイデオロギーなのだ，とプロクターは言う。しかし「科学が封建的くびきから自由になるための闘いの中で自ら

を中立と宣言することと，科学が自ら権力を握った後でそうすることは同じではない。後者においては，中立性は権威からの自由ではなく，コミットメントからの逃走――さらに悪いことには，社会運動や批判を挫くための道具となるのである」。

では無知学は，この「価値中立性」批判とどのような関係にあるだろうか。「価値中立性」は，往々にして科学が自然を解き明かすものであるということに由来するとしばしば語られる。しかし本稿でも見てきたように，科学は自然のすべてを明らかにすることはできない。「特定された無知」のうち，どれを実際に探求するかは私たちの価値観や社会における優先順位に依存しているのである。そこには意識的にせよ無意識にせよ，取捨選択による無知が作られざるを得ない(卑近なところでは，研究費の分配などによってもこの種の無知は作られる)。すると自然――あるいは「自然さ」――に仮託して中立性を語ることは，プロクターやシービンガーもいうように，そうした科学の実際上の制約・偏向を隠蔽する1つのイデオロギーの表明にすぎないのである。そして無知学が明らかにしてきたように，無知を作る人々は往々にして科学の中立性を強調するのである。

私たちは，科学が明らかにしたことと同様，あるいはそれ以上に，科学が明らかにしなかったこと――すなわち無知――を「自然な」もの(欠如)とみなす傾向がある。しかしプロクターのいうように，②「重要なのは無知の自然さを疑うことである」。私たちの無知は決して「自然」で中立的なものではない。にもかかわらず，何かを「自然」だと思うことは，その来歴を忘れることである(これも無知の一形態である)。私たちが知らないことについて，それは偶然(自然と)知らないのだ，という以外の見方を可能にすること。ある無知について，それをなぜ知らないのかと問うことを可能にすること。無知を歴史化すること，すなわち政治化すること――。

権力とは往々にして自然化する力である。私たちが今生きている世界の由来を忘却する時，それは「自然」なものであって私たちがただ受け入れざるを得ないものとなる。世界が「自然化」される。自然化とはつまり歴史の忘却である。無知学とは，その権力による自然化に抗って，無知を再び歴史化することで，それを政治化しようとする試みであるといえるのではないか。プロクターは，タバコを日々吸うということがあたかも自然のようにみなされているが，それは違うと言った。シービンガーも，ジェンダーにまつわる不平等が自然の名の下に正当化されてきたことを批判した。ボ

ヌイユとフレソズは，人新世が自然なものとみなされその来歴が忘れられている現状に，複数のナラティヴを対置してみせた。オレスケスとコンウェイも，気候変動が自然現象である――それゆえ「何もしなくていい」――と言う人々と戦ってきた。

「権力にたいする人間の闘いとは忘却にたいする記憶の闘いにほかならない」，とチェコ出身の作家ミラン・クンデラの小説の登場人物は言った。無知学は，そのような「闘い」にコミットする点で，まったく政治性をもたないという意味での「学術」であることを自ら主張することはないだろう。むしろそれは，いかなる学術も政治性を免れ得ないことを前提とし，その政治性の忘却（あるいは隠蔽）に対して学術の内部から「運動」を仕掛けようとするものだと言える。無知学は，自然化された私たちの世界に対して，知と抵抗を呼びかけるのである。

注：資料の中略部分。

（問題作成の都合上，本文の一部を省略した。また，注は，出題者が付けたものである。）

令和７年度入学試験　　小論文「出題意図」

（入試情報公開用）

行政政策学類　一般選抜　前期日程

本問は，鶴田想人「無知学（アグノトロジー）の現在　＜作られた無知＞をめぐる知と抵抗」（『現代思想』2023 年 6 月号）の一部を資料として用い，読解力や要約力，論理的思考力や論述力を問うものである。

資料において筆者は，まずタバコとオウコチョウの例を紹介し，私たちに知識をもたらすとされる科学が，決して社会から独立したものではなく，そのさまざまなアクターの思惑によって時に意図的に，時に意図せずして無知をも作り出す，と主張する。そして，プロクターの議論を借りて，無知学は，作られた無知という視点から歴史を眺め，無知という複雑で重層的な現象を，有用性，構築性，意図性という３つの次元で分析することによって理解するものである，と説明している。その後，水俣病の事例等を用いて，その説明を敷衍し，無知の自然さを疑うことの重要性を論じている。

設問(1)は，本文中の「無知が『作られる』とはいかなることだろうか」という部分の内容を説明させるもので，読解力および要約力をみるものである。

設問(2)は，本文中の「重要なのは無知の自然さを疑うことである」という部分の内容を説明させるもので，読解力および要約力をみるものである。

設問(3)は，無知を三次元的に分析する筆者の考えを要約させた上で，作られた無知の事例を１つ挙げさせ，筆者の考え，すなわち，当該事例について，その無知が誰によって／いかに作られ，それが誰の利益／不利益になるのか，という視点に立って，その事例を説明させることにより，読解力と要約力，論理的思考力と論述力を総合的にみるものである。